

1870年代、日本の「征韓」計画と朝鮮東海岸

日本竹島＝独島問題研究ネット、代表
朴 炳 渉

【日本語要約】

日本で「征韓」論が沸騰する以前の1872年、陸軍大将西郷隆盛は「征韓」の軍事作戦まで立てていた。彼は失政による内乱の発生を「征韓」で防ごうとしたのである。また、外務卿副島種臣は東方を制覇するための一環として帝国主義的「征韓」を主張し、独自の「征韓」戦略を立てた。これら西郷や副島の戦略には欠陥があった。朝鮮東北部にて軍艦が着岸できる港湾を見つけられず、その地方での軍事作戦を立てられなかった。この欠陥を克服する前に西郷や副島ら「征韓」派参議は政争に敗れて下野した。しかし、副島の「征韓」構想は外務省内で瀬脇寿人や森山茂らに引き継がれた。瀬脇は朝鮮東北部に潜入して良港を探して軍港を作る手順などを調査しようとしたが、外務省内の反対でその調査だけは中止になった。

一方、森山はアメリカのペリー提督をまねて砲艦外交を試みた。そのために派遣された雲揚艦長井上良馨は、釜山や東海岸の水路を調査し、永興湾に軍艦が入港できることを実証し、東北部の港湾問題を解決した。また、彼は森山から砲艦外交の効果がないことを聞かされ、事件を起こすつもりで雲揚に弾薬を満載した後、朝鮮南岸・西岸の水路を調査し始めた。ついに、要塞になっていると聞いていた江華島水域の測量をおこない、朝鮮守備隊と砲撃戦になった。この江華島事件を知らされたロシア公使榎本武揚は、事件を「戦争の原因」と見なし、釜山を占拠して朝鮮に最後通牒を突きつけ、首都に進撃するとともに、東海岸の永興湾にも上陸して朝鮮を圧伏するよう進言した。しかし、日本政府は砲艦外交に徹し、江華島条約を結んだ。このころ、榎本はロシアが元山の租借を計画しているという情報を得て外務卿へ知らせた。日本政府は、ロシアの南下を抑えるためにも永興湾を日本に対する開港地にすることにこだわり、難色を示した朝鮮側から同意を得た。永興湾は、日本にとって「征韓」と国際政治の両面から軍事的に重要な港湾であった。

<キーワード> 西郷隆盛、井上良馨、榎本武揚、軍艦雲揚、砲艦外交、永興湾

本稿は、「1870년대 일본의 ‘정한’ 계획과 동해안」、
『領土海洋研究』25号(2023.6、東北アジア歴史財団)、pp.7-47 修正・翻訳である。

<http://www.kr-jp.net/ronbun/park/park-2306k-1870.pdf>

I. はじめに

日本海軍水路局は、朝鮮の海図としては最初になる「朝鮮東海岸図」を1875(明治8)年2月に刊行し、翌年改訂した。これは英国やロシアの海図を基本にして水深まで記した本格的な海図である。この海図は、よく知られているように鬱陵島を「松島」、独島の東島をロシア名の「メネライ礁」、西島を「オリウツァ礁」と記したが、これ以外にも特徴がある。港湾の拡大図として、ラザレフ(Lazarev、永興)湾、ウンコフスキ(Unkovskii、迎日)湾、ロシアのポシエツ(Posiet)湾、金角(Golden Horn、ウラジオストック)港など4港が掲載された。海軍はこれらの港に特別な関心をもっていたのである。

1875年6月、日本海軍は朝鮮では最初に釜山港、永興湾、迎日湾にて測量をおこなった。これら東海岸を測量した船は、後述する軍艦雲揚である。彼らは測量の結果、永興湾は釜山に次ぐ良港であり、食料と塩が豊富である一方、朝鮮の軍備が低劣であることなどがわかったという¹。しかし、この測量には謎が多い。このころの日本は、自国の沿岸すら測量できず、それをイギリスの測量船シルビア(Sylvia)にまかせて測量技術を学びつつあった²。そのように測量技術が未熟な日本が永興湾でおこなった測量とはどのようなものだったのか、また、なぜ南海岸や西海岸より経済的・軍事的価値の低い東海岸を先に測量する必要があったのかなど疑問が多い。

その当時、日本政府が永興湾に特別な関心をもっていたことは他の資料からも確認できる。後日、初代の駐韓日本公使になった花房義質は、外務卿寺島宗則に宛てた書状にて瀬脇寿人を朝鮮問題と関連させラザレフ港、すなわち永興湾一帯を探知してくれば、必ず益あるべしと記した³。永興湾の探知とは軍事的な偵察以外考えられない。そうであれば、これは非常に危険な任務である。当時、辛未洋擾事件などを経験した朝鮮政府は全国に斥和(斥洋)碑を全国に建て、外勢の侵入に対する警戒を強化していた。そんな時局に永興湾に潜入して軍事的な偵察をするということは、命賭けの仕事である。なぜ日本政府はそうした危険にもかかわらず、永興湾に特別な軍事的偵察を計画したのであろうか。これはきっと日本政界で大きな問題となった「征韓論」と関係があると思われるが、これに関する先行研究はないようである。本稿は上記の疑問点を解明する。

日本の「征韓論」といえば、西郷隆盛らが朝鮮の「無礼」を問責する「征韓論」がよく知られる。しかし西郷の「征韓論」は、朝鮮の「無礼」以前から始まっていた。それだけではなかった。陸軍大将兼参議である西郷は、参議の板垣退助とともに具体的な軍事作戦まで立てていた。しかし、その作戦計画には欠陥があった。朝鮮東部では軍事作戦がまったくなかったので万

¹ 金亨圭, 「1875年朝日交渉의 失敗要因」, 『韓日關係史研究』45集, 2013, 16頁。

² 小林茂『外邦図』, 中公新書, 2011, 31頁。

³ 朴漢珉, 「1870年代日本記録에 나타난 鬱陵島開拓願과 長崎縣」, 『領土海洋研究』第23巻, 2022, 15頁。

全ではなかった。本稿はその理由を解明する。

一方、「征韓」論は、1873年の政変によって「征韓」派の参議が全員下野したため、終わったと理解されがちである。そのためか、政変後の「征韓」計画に関しては、本格的な先行研究はないようである。しかし、その後も日本政府内で「征韓」計画は引き続き提起されているので、その内容を調査し、東海岸との関連も明らかにする。

本稿では、年月日は基本的に陽暦を使用する。また、引用文の()内は原文通りであり、[]内は筆者の注である。

Ⅱ. 「征韓」政変以前の「征韓」計画

1. 日本陸軍の「征韓」計画

1870年、日本外務省は朝鮮政府との修交のため、最初の公式使節として外務権少丞 吉岡弘毅らを釜山の倭館に派遣した⁴。彼らは外務卿 沢宣嘉が礼曹参判に宛てた書契などを持って12月に倭館へ到着した。この書契は日朝政府間の交流を提案するもので、天皇とは無関係だったため、朝鮮側が嫌う皇、勅などの文字を使わなかった。しかし、朝鮮側は、折しも日本人も乗船していたドイツ軍艦が釜山に入港したために日本に対して不信感を抱くようになり、対州(対馬藩)以外の日本官吏との会談を基本的に拒否した。これにより日朝交渉が膠着状態に陥るや、日本政府は朝鮮との交渉を断絶することを決定した。同時に、朝鮮との懸案を軍事力で解決する方法を模索し始めた。

1872年10月、外務大丞 花房義質は朝鮮を威圧するかのように軍艦春日を率いて釜山に入り、対州の朝鮮に対する債務などを一方的に精算し、倭館を占拠して外務省公館と称した。日本政府は春日艦を朝鮮に派遣する前に、朝鮮の軍事情報を積極的に収集した。彼らは横浜港に停泊しているアメリカ軍艦から「アメリカ、フランスなどが朝鮮国を攻撃した場所、すなわち江華島の測量図」などを借りて模写した⁵。彼らの朝鮮攻撃とは、丙寅(1866)、辛未(1871)洋擾を指す。また、春日艦は釜山で朝鮮地図を入手した。この地図は倭館にあったものを押収したようである。海軍水路局はこの地図をもとに海図丙1号<朝鮮全図>⁶を作成し、

⁴ 吉岡に先立ち、外務省出仕の佐田白茅らが倭館に派遣されたが、彼らは「対州官吏」と称したので、外務省の正式な使節ではなかった。

⁵ 小林茂, 2011, 前掲書, 41頁。

⁶ この地図は満州黒竜江下流の「奴児干」まで記入されているので、原図の系統は日本国立公文書館が所蔵する「朝鮮國圖」(請求記号 178-449)と同じである。対州が16世紀頃に作成し、壬辰乱の際に豊臣秀吉が使用したと考えられている。この系統の地図の特徴は、多数の小さな島の名前を記録したこと、鬱陵島を干山島の東側に描いたことなどである。長正統, 「内閣文庫所蔵「朝鮮國圖」およびその諸本についての研究」、『史淵』119号、1982、127頁。

翌 1873 年 10 月に刊行した。この地図の朝鮮北部の様子は実際の形状と大きく異なる。

一方、陸軍は花房に二人を同行させた。一人は陸軍大将 西郷隆盛と同郷の薩摩出身の別府重頼大尉、もう一人は参議板垣と同郷の土佐出身の北村景長少佐である。彼らは朝鮮人に変装して東萊を偵察した。帰国後、彼らは、朝鮮人は弱く、日本の相手にはならないと豪語した。また、別府は朝鮮八道を蹂躪することを熱心に主張した⁷。そのためには2～3個中隊で十分だと豪語した⁸。彼らの情報や外務省から借りた地図「朝鮮絵図」⁹などをもとに、西郷は板垣および太政官左院副議長 伊地知正治らと共に「征韓」計画を立てた。かつて日本政府の「征韓」計画は、外務省出仕の佐田白茅の計画などがあったが¹⁰、これは机上の空論に近いものであり、廟堂ではほとんど検討されなかった。したがって、今回の板垣らの「征韓」計画は、実戦を想定した最初の計画であった。

西郷らは「征韓」戦略会議を12月8日頃から頻繁に開いた。最終的な「征韓」戦略は、〈図1〉のように兵士4万人を釜山に上陸させ、2万人を陸路で漢城に進撃させる、朝鮮が迎撃のために出動したら残りの軍隊のうち1万3千人を江華島方面から漢城に進撃させ、7千人を平壤に上陸させて朝鮮王と軍隊の退路を遮断するというものだった。彼らは朝鮮の物産や交通なども調査し、武器の使用計画などを書いた小冊子まで作成した。彼らは朝鮮軍について、「大凡の賦兵員、乱世の末二十二万八千、治世の末九万四千五百、内八分の一騎兵。……内三分の一を先鋒と称し、都詰のものは支那古流の調練なすことあれども外(西洋式の調練)は知らず。調練をなすと唱うるもの蓋し三万余なるべし」と分析した。また、過去の戦役として「文禄の役(壬申倭乱)」や丁卯胡乱や丙子胡乱などの経過を分析し、後金による朝鮮征服が成功し、日本の朝鮮出兵が失敗に終わった理由について、日本軍が朝鮮を極寒の地であるという誤った認識に基づいて夏5月頃から征討を開始したために、朝鮮軍を北方の山岳地帯に逃がしてしまったことと、日本軍が朝鮮半島に侵攻した時には釜山から上陸して北上したので、朝鮮軍主力を取り逃がしてしまったためであると記した。こうした反省から伊地知は、「征韓作戦」を冬季に実施することや、銃器はミニエー(Minié)銃を用いることなどとした。この銃なら内戦が終わったばかりの日本には大量に余っているし、士族らも取扱になれていた

⁷ 煙山専太郎、『征韓論実相』、早稲田大学出版部、1907、175-178 頁。この書では兵士たちは別府進介少佐、北村長兵衛中佐と紹介されているが、太政類典・第二編・明治四年～明治十年・第九十巻・外国交際三十三・諸官員差遣五、「花房外務大丞外数名差遣」には本文のように記された。JACAR(日本アジア歴史資料センター) Ref. A01000019400.

⁸ 広瀬為興、「明治十年 西南ノ戦役 土佐拳兵計画ノ真相」、『鹿児島県史料 西南戦争』제 3 권, 1979, 1017 頁。 <https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-1000001444304-00>; 諸星秀俊, 「明治六年「征韓論」における軍事構想」、『軍事史学』177号, 2009, 56-57 頁。 .

⁹ 『朝鮮事務書』巻之十五, 「史官ヨリ朝鮮繪圖返却ノ爲メ來翰」, JACAR, Ref B03030169600-0012.

¹⁰ 佐田の「征韓」計画は、軍隊30大隊が多方面から攻撃し、国王を捕虜にするというものである。『大日本外交文書』第三巻, 88 項, 138-140 頁; 佐田白茅, 『征韓論の舊夢談』, 私版本, 1903, 42-45 頁。

のである¹¹。

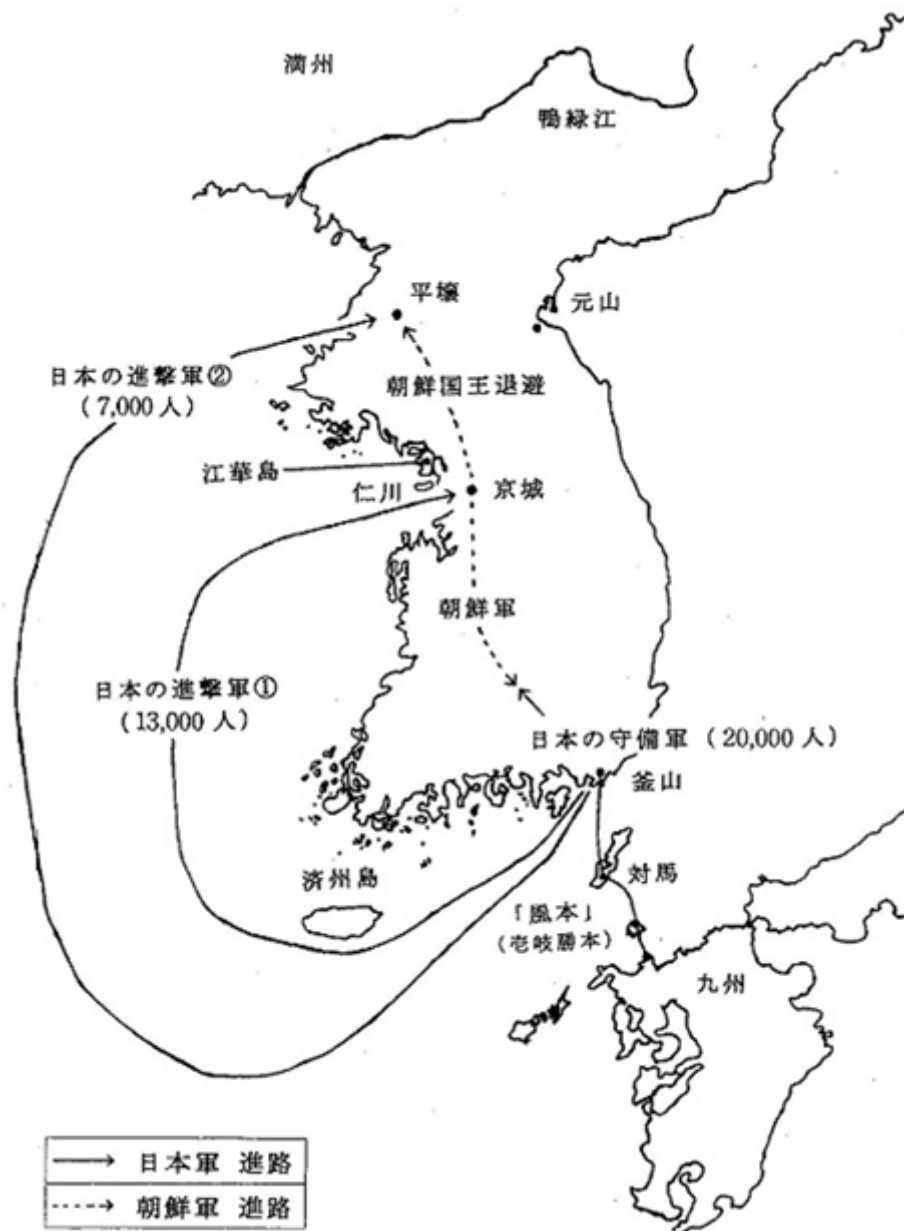


図 西郷・板垣・伊地知らの征韓作戦

<図1> 日本陸軍の「征韓」戦略¹²

しかるに、この戦略には欠陥があった。朝鮮東海岸に対する作戦が全くなかったのである。

¹¹ 鹿児島県教育会編、『伊地知正治小伝』、鹿児島県教育会、1936、23-25頁；諸星秀俊、2009、前掲論文、51-58頁。

¹² 諸星秀俊、2009、前掲論文、5頁。

したがって、彼らが攻撃を開始すれば、朝鮮王が東北方面に避難する可能性がある。彼らはこれを知っていても、朝鮮東海岸で軍艦を入港できる港に関する知識がなかったので作戦を立てることができなかつたのである。

ここで注目されるのは、西郷らは本格的な「征韓」論が議論される前から「征韓」計画を立てていたという事実である。その理由は日本国内の問題にあらう。当時、日本では士族の不満が尋常ではなかつた。かつて彼らは新政府に敵対する地方勢力を鎮圧するために各地で戦った兵士たちである。ところが内乱が終わり、版籍奉還、廃藩置縣などの内政改革や近代化が行われるや、多くの士族が失職した¹³。彼らは生計を維持するための最低限の俸禄を国から受け取っていたが、俸禄制度の改革により、生計が苦しくなった士族が増えた。さらに、全国民を対象とした徴兵制の導入は、士族たちの存在意義さえ失わせるものであったため、士族たちは強く反発し、社会不安が増大した。

一方、留守政府¹⁴の各省庁は野心的な改革を実施するため、予算獲得をめぐって大蔵省と大きな摩擦を起こした。さらに大蔵大輔井上馨が汚職事件に巻き込まれ辞任した。また、陸軍大輔の山県有朋が関与した汚職事件が起こるなど、政局が混乱して留守政府は非常に不安定であった。このため、いつ士族の反乱が起こるか計り知れないありさまであった。このような状況を懸念した西郷は、よく知られているように「内乱を冀う[不平士族たちの]心を外に移して国を興すの遠略」¹⁵を構想した。このように西郷の「征韓」の主眼は、政治不信や政府に対する批判の目を朝鮮に向けさせ、内乱を防ごうとするものであった。

こうした困難な内政を解決するために政府の実力者たちが「征韓」を主張したのは今回が初めてではなく、明治初期にもあった。維新の三傑と呼ばれる木戸孝允は、対州の言う朝鮮の「無礼」¹⁶を口実に「征韓」を主張した。その意図は、世論を「征韓」に集中させることで、天皇を中心とした強力な中央集権体制を確立し、近代的な国家を建設しようとするものであった¹⁷。こうした木戸や西郷の「征韓」は、困難な内政を「征韓」で解決しようとするもので、「失政転

¹³ 1869年の版籍奉還により、各地方の藩主らは天皇から藩知事に任命されたが、収入は10分の1に減った。このため、多くの家臣、つまり士族が失業した。さらに1871年の廃藩置県によって藩知事制度まで廃止され、失業した士族が増加した。

¹⁴ 1871年の廃藩置県直後、多くの参議が参加した岩倉使節団が欧米諸国を巡訪していた。残された参議などによって維持された政府を「留守政府」と呼ぶ。

¹⁵ 明治6年8月17日付 板垣宛西郷書簡(大西郷全集刊行会『大西郷全集』平凡社、1927、755頁)。

¹⁶ 対州の言う朝鮮の「無礼」は、藩主が1868年5月27日に政府に提出した建議書によると次のとおりである。建議書は朝鮮との関係をつぎのように説明した。対州は人口の3割も養えないような不毛の地なので、朝鮮と「私交」の条約を結び、不足する糧食を朝鮮に求め、送使・歳遣をおこない、数百年間「嗟來の食」を得ていた。これは「藩臣の礼」をとるに等しい屈辱である。歴史を遡れば、往古、天皇は韓国[ママ]に日本府を立てたこともあったのに現在は不庭、すなわち天皇へ朝貢をしていない。明治維新を機に、朝鮮との通交刷新の機会を逃さず、日本が韓国に仁恩と威嚇とを並行してよく統御すれば、数年後に朝鮮は日本の「外府」のようになるであろう。『大日本外交文書』第1第1冊、288項、658-666頁。

¹⁷ 荒川九寿男、「明治初年における木戸孝允の征韓論」『皇学館大学紀要』12号、1974、237-238頁。木戸は、1869年に版籍奉還が行われ、中央集権体制がほぼ確立されるや「征韓」に消極的

嫁型征韓論」と呼ぶことができる。

3. 日本外務省の「征韓」計画

外務省では国権伸張主義者として知られる外務卿副島種臣が「征韓」に積極的であった。彼は、時には板垣らの「征韓」作戦会議に加わるなど¹⁸、「征韓」論に大きな関心を寄せたが、ついには独自の「征韓」計画を構想するまでになった。英国外務省資料によれば、副島が駐日英国公使パークスに語った「征韓」の構想は、5万の兵力を動員し、半数を清国国境に近い北西部に、残りの半数をロシア国境に近い北東部に上陸させて朝鮮側の退路を遮断する、その上陸地点にそれぞれ一万の兵力を残留させて清国やロシアの介入を防ぐ、残りの主力軍を二方面から南下させ百日以内に朝鮮を征服するというものであった¹⁹。副島は朝鮮を北方から侵攻する理由について、壬辰乱(文禄の役)のとき、太閤様(豊臣秀吉)が南から侵攻したので、朝鮮国王が北へ逃げて失敗したためと説明した。

副島は、この方策には欠点があることを承知していた。朝鮮北西部には軍艦の入港が可能な港湾はあっても、北東部にはそうした港湾がないことである。この問題を解決するために、彼はロシアの港に上陸して朝鮮に南下する作戦を模索し、駐日ロシア公使ビューツォフ(E. Butzov)と交渉に入った。副島は日本がサハリンを放棄する代わりに、ロシアが領有する千島列島の一部を日本に譲渡すること、日本が朝鮮に侵攻した場合、ロシアは中立を守ること、日本軍がロシア沿岸に上陸して朝鮮に南下することなどを認めることなどを提案した²⁰。副島の提案に対し、ビューツォフは日本軍がロシアを通過することだけは認めなかった。理由は、これを認めるとロシアの中立に問題が生じるというのであった。このため、外務卿の「征韓」構想にて朝鮮東北部の港湾問題が大きな課題として残された。

副島が「征韓」を熱心に推進した理由は、彼の東方政策にある。彼は政府に提出した建白書で次のように提言した²¹。現在、日本で最も警戒すべきことはロシアの南侵である。しかし、清国は力が弱く、それに対応できないので、その任務は日本が引き受けるべきである。日本は北方では朝鮮を日本の保護下に置いてロシアの侵略を阻止し、南方では台湾を攻略して日本が拠点を作らなければならない。台湾が外国に渡れば、彼らは勢力を清国に拡大し、日本が危うくなる。したがって、必ず台湾海域を日本の勢力範囲に入れ、また朝鮮を日本の権力下に置き、半月型に清国を包囲して東洋を制覇し、ロシアの来侵を防衛しなければならない。このように副島の「征韓」の主眼は東洋を制覇するためのものであり、彼の「征韓」論は

になった。

¹⁸ 鹿児島県教育会編, 1936, 前掲書, 1017 頁。

¹⁹ British Foreign Office, *F.O. 46*, 168, No.91, 1873.11.3(国会図書館マイクロフィルム所蔵); 宮地 正人, 『幕末維新変革史』下巻, 岩波書店, 2012, 299-300 頁。

²⁰ 醍醐龍馬, 「外務卿副島種臣と日露領土交渉」, 『国際政治』191号, 2018, 25 頁。

²¹ 煙山専太郎, 『征韓論實相』, 早稲田大学出版部, 1907, 196 頁。

「帝国主義型」と言える。

3. 「征韓」論政変

1873年5月(陰)、東萊府は対馬の商人を仮装した日本商人を告発した。日本商人とは、以前から対馬藩の貿易署と取引をしていた三井呉服店系列の三越呉服店の使用人3人である。三井は陸軍省武庫司御用達を務める大商人であるが、廃藩置県や外務省の倭館接收などによって対馬藩の貿易署が廃止になって牛革などの輸入品に支障が出るようになったので、外務省の斡旋により「貿易の実景」を試すために釜山倭館を拠点に対馬商人を装って商売を始めた²²。東萊府は対馬以外の商人が交易をおこなったことを激しく非難し、取締を厳しくするよう命じた伝令書を管轄下にある倭館の守門将に送り、守門の室内に掲示した。この掲示は、日本を「無法之国」と書き、日本人が妄錯して事を起こしたりして後に後悔しないようにさせよ、などと記した²³。

この伝令書の内容が公館から外務省へ報告された。これを契機に日本では「征韓」論が沸騰した。特に板垣退助は居留民保護のために軍隊を派遣するよう主張した。しかし、西郷隆盛は伝令書を理由に軍隊を派遣するのは名分として弱いので、先に朝鮮政府を問責する使節を派遣するよう提案し、みずから遣使として渡韓したいと申し出た²⁴。これに対して副島は、外交交渉は外務省の役割なので、自分が使節として渡韓すると主張した。しかし、西郷は、自分は外務卿のように巧みな交渉はできないが、朝鮮で死ぬことはできると主張し、自分を使節として派遣することを主張した。結局、閣議は西郷の派遣を内決したが、使節派遣は戦争に発展する可能性があるため、欧米諸国を訪問中の岩倉具視使節団の帰国を待つて最終決定することになった。

西郷が使節として派遣されることは重大な意味を持つ。陸軍大将を兼ねる西郷が行くとなれば日本政府の使者というよりも、天皇の使者、つまり「皇使」になる。皇使は、所期の任務を達成できなければ死をもって謝罪しなければならないほどの重大な覚悟が必要である。また、西郷自身も、かつて江戸幕府打倒のために活躍した時代から尊皇の意志が強かったが、今回彼は死を覚悟して使節としての使命を果たすことを決意した。もし西郷が朝鮮で事件を起こした時に朝鮮側がうまく対処できなければ日本で「征韓」論が噴出するだろう。したがって西郷の派遣は戦争に発展する可能性が高かった。

西郷・板垣らは朝鮮との戦争に備えて具体的な「征韓」戦略をたてた。その内容は、①西郷が参議兼陸軍大将という資格で公式使節として朝鮮へ渡る間、板垣と伊地知は陸海軍を

²² 『朝鮮事務書』巻之十九、明治6年「1月21日[陰]森山茂へ往信」、JACAR Ref B03030171800, 0037-0038.

²³ 『大日本外交文書』, 第6巻, 119 項, 282-283 頁。

²⁴ 多田好問, 『岩倉公実記』下巻, 原書房, 1968, 49 頁。

率いて九州の壱岐島風本²⁵に待機し、万一、西郷による談判が決裂した場合には、直ちに朝鮮へ出兵する。②朝鮮の上陸作戦には軍艦、東・龍驤・日進・雲揚などを始めとして14隻と輸送船3隻および外国から借用の輸送船を使用する。③動員兵力は九州を中心に約4万人とする。④進撃作戦は<図1>のようにするというものであった²⁶。

一方、岩倉使節団は1873年9月に帰国し、すぐに留守政府が内決した西郷隆盛の使節派遣問題を協議した。欧米諸国の発達した文化と科学技術を直接見て日本の後進性を痛感した彼らは、日本は世界の発展段階に政治的にも経済的にも対応できる体制を構築することが急務であるという信念を持ち、朝鮮との戦争の可能性が高い西郷の派遣には断固反対した。

これは、以前に征韓論²⁷を唱えていた木戸孝允も同様であった。彼は、彼の意向通りに版籍奉還、廃藩置県が成立し、天皇を中心とした中央集権体制が確立されるや、「征韓」は近代国家建設に有害であると判断し、「征韓」に猛烈に反対した。また、木戸の「征韓」論に賛同していなかった岩倉および大久保利通なども、もちろん西郷の「征韓」に強く反対した。このように、岩倉使節団の参加者たちは、ほぼ内政を優先し、「征韓」を主張する参議らと鋭く対立した。この対立を解消するため、太政大臣 三条実美は妥協案として使節派遣の延期を提案したが、西郷の強い反対で妥協は成立しなかった。西郷は、先の内決通りに使節派遣を行わなければ、自分は自決して国友に謝罪すると三条に通告した²⁸。もし西郷が自決すれば、その影響は計り知れない。驚愕した三条は、やむなく使節の派遣を決定し、これにより内閣は完全に分裂した。そんな中、三条は心労で発病し、職務遂行が不可能になった。そこで、右大臣の岩倉具視が太政大臣を代行した。岩倉は、三条が決めた使節の即時派遣案と、自分たちが考える派遣延期案の二つを天皇に上申した。天皇は派遣延期を命じ、西郷ら「征韓」強硬派は政争に敗れた。その結果、西郷、副島ら参議5人が辞任し、いわゆる岩倉・大久保内閣が誕生した。新外務卿には寺島宗則が任命された。

Ⅲ. 高宗の親政と日本の「征韓」準備

1. 森山茂の「征韓」論

1873年、高宗の親政体制が確立して大院君が退き、閔氏勢力が徐々に権力を掌握した。1874年、朝鮮政府は大院君に近い東萊府使、訓導などを罷免し、対日政策を再検討した。

²⁵ 風本は、神話にて神功皇后が「新羅征伐」の時に启航した港であり、凱旋して帰航時に勝本と改称したという伝説が残っている。

²⁶ 諸星秀俊、前掲書、56-57頁。

²⁷ 木戸の「征韓」計画は兵力で釜山港を開港させることであり、もし戦闘が始まれば、数年にわたって着実に侵攻を続けるというものである。木戸公傳記編纂所、1930、『木戸孝允文書第3』、日本史籍協会、233頁；荒川九寿男、1974、前掲書、220-221頁。

²⁸ 高橋秀直、「征韓論政変と朝鮮政策」、『史林』、75巻2号、1992、93頁。

日本政府は釜山の倭館から「朝鮮国論一変」という報告を受け、5月15日、森山茂に朝鮮の「事情探索」を命じた²⁹。森山は倭館で朝鮮の状況を調査する過程で事情探索の範囲を超えて朝鮮側と会談を持ち、友好的な雰囲気の中で両国間の懸案を議論した。森山は10月まで交渉を続けた結果、今後50日以内に日本外務卿の礼曹宛て書契などを持参することなどを合意した³⁰。

日本へ帰国した森山は、1875年2月、英国公使パークスと面談し、朝鮮問題を話し合った。森山は自身を米国提督ペリー(M. C. Perry)になぞらえた。ペリーは軍艦4艘を率いて砲艦外交で日米交渉をおこない、1年後、日本に開国を決断させた。日本は彼を近代化の道を開いた恩人のように考えるようになった。森山はそんなペリーを見習い、朝鮮を開国させるには砲艦外交が必要だと考えた。彼はかつて砲艦外交を次のように主張した。

これまで幕府は天皇の臣下として外国と交際してきたが、こうした大経大法に非ざることなどを改め、皇使を派遣して説明し、彼我援救の至誠を示し、世界の急激な変化を説き、文力武威を供同し、協力して万国に対峙することを説けば、頑固な彼らも無下に退けないであろう。これには兵力の助けが必要である。天皇の詔を奉じる大使が軍艦数隻をともなつて釜山の倭館から東萊府に入り、大使が漢城へ行く趣旨を伝え、平和的に恩を施して民望を得て、兵力で日本の威厳を示し、旧例によって漢城に行くことを知らせる。その10日後、大使が江華から漢城へ入る。もし、朝鮮がこちらの礼序を拒絶したり提議を受け入れなかったり、大使を冒瀆したり、兵士たちを動かすなら、正当性はこちらにあるので軍隊を進撃させ、一挙に征服する。これを清国が非難する理由はない³¹。

森山の「征韓」論は、武力を用いてでも朝鮮を開国させ、日本が主導して西洋列強諸国に対抗するというものである。一方、森山が考える朝鮮を一気に征服する方法は、彼が1875年にパークスに語ったところによると、強力な軍隊2万人を朝鮮北部に上陸させ、一部は中国やロシアの干渉に備えて北部に残し、残りの本隊は首都に向かって南進し、山岳地帯に逃げようとする国王を捕えるというものであった³²。この方策は元外務卿副島の戦術を引き継いだもので、兵士の数5万人から2万人に減らしただけである。このように森山は副島の「征韓」戦略を引き継いだ。しかし、この計画の弱点である朝鮮東北部の港湾問題はそのまま残った。

2. 瀬脇寿人の「征韓」準備と朝鮮偵探

瀬脇は森山や副島らの「征韓」計画の致命的な弱点を克服するため、1875年1月、外務

²⁹ 『大日本外交文書』第7巻, 208項, 361頁。

³⁰ 同上書, 218項, 414頁。

³¹ 『大日本外交文書』第3巻, 88項, 140-142頁

³² 英国外務省、*F.O. 46*, 190, Parkes' No.33, 22 Feb 1875; 宮地正人, 2012, 前掲論文, 297頁。

卿寺島に宛てた書状にて朝鮮の現地調査を次のように提案した。

今の情勢を見ると、ロシアは朝鮮に手を出し始め、西洋諸国は支那に手を出しています。日本も早く決めて、支那東北の盛京から朝鮮南岸のクエルポルト[Quelpart、済州島]諸島および朝鮮東北のウラジオストクからチョサン[豆満江の南]地方に人を送り、地形、人物、産物をはじめ、ヨーロッパ・ロシア人の状況を綿密に探るようにする一方、海上には軍艦を派遣し、上記地域の海の深さを測定し、岩礁などを調査することを望みます³³。

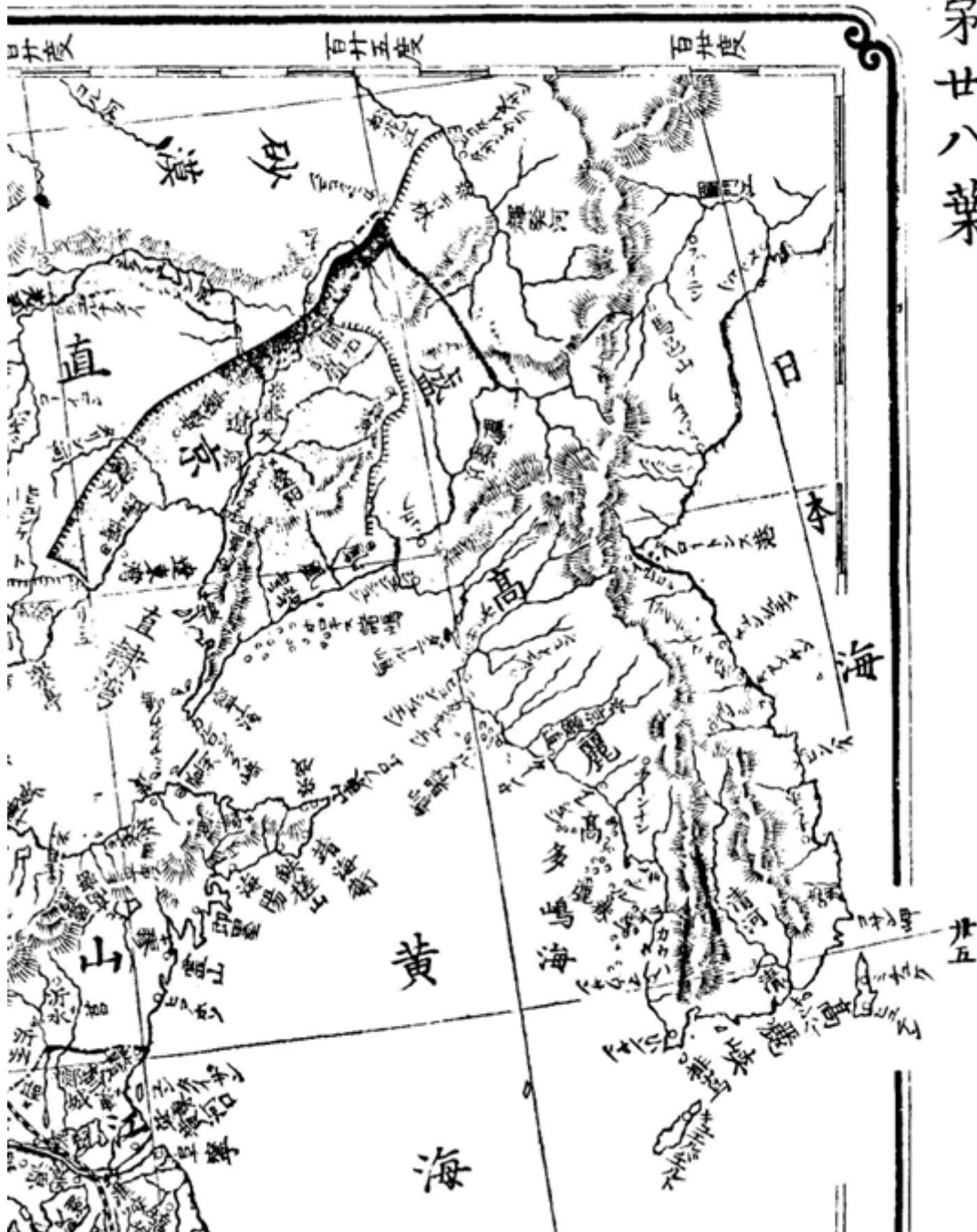
瀬脇のいう盛京は、彼が 1862 年に手塚律蔵という改名前の名前で翻訳した『格尔屯氏萬国図誌』³⁴の付図、「格尔屯氏支那地図」<図2>を見ると、遼東半島および遼東湾を含む現在の遼寧省全体を指す。彼は朝鮮に隣接する盛京から朝鮮西海岸に、ウラジオストクから朝鮮東北部に軍艦や人を送り、水路や地形などを調査することを提案していたのである。

このような考えを持つようになった理由は、ロシアの極東進出にある。彼は上の書状にて、ロシアは北京条約により沿海州を得た後、朝鮮に進出するための準備として、豆満江を渡ってくる朝鮮住民を受け入れていると記した。また、彼はロシアの進出による弊害が日本に及ぶ前に、朝鮮を日本側に引き入れるべきだと主張した。この方策として朝鮮との友好を図り、日本が教化を行って技術を伝授すれば朝鮮は自ら服従するだろう、さらに彼らにロシアの脅威をよく説明すれば朝鮮が日本側に立つことは間違いないだろう、このような戦略を実行したいと提案した³⁵。瀬脇はこの戦略が平和的に達成できない場合は軍事的解決も考え、軍艦派遣に備えて水路調査も提案していたのである。

³³ 寺島宗則研究会、『寺島宗則関係資料集』下巻，示人社，1987，564 頁。

³⁴ 手塚律蔵・佐波銀治郎、『格尔屯氏 萬國圖誌』，1862。復刻版は、鈴木忠、『佐波銀治郎の生涯』，佐倉歴史顕彰会，1991。原本は、Colton, G. W., *Colton's Atlas of the World Illustrating Physical and Political Geography*, 1855, New York.

³⁵ 寺島宗則研究会，1987，前掲書，564 頁。



<図2> 瀨脇らが翻訳した「格爾屯氏支那地圖」(一部)

瀨脇は、「ロシアの弊害が日本に及ぶ前に」と書いているが、ロシアの弊害はすでに日本に及んでいた。南下政策を実施していたロシアは、1861年に対馬西海岸の中央にある芋崎を占領し、租借を要求した。これに対して日本とイギリスが激しく反発したため、ロシアは6か月後に退去した。

瀨脇の提案に対し、外務卿寺島は朝鮮東北部の調査を認め、太政大臣三条へ伺書「ボシ

ポシエツト探知の為、当省官員 両三輩 派出之義伺」を提出した³⁶。その内容は、「ロシア国ポシエツトの義は朝鮮国に隣接し、同所の景状を最も探知致したき義に付、本月下旬より来月初旬の内、当省官員両三輩、右探知調査の為めポシエツトへ派出致したく」伺うというものであった。伺書のタイトルが「ポシエツト探知」とあるので調査は朝鮮だけでなく、ロシアの朝鮮への関心なども調査対象に含まれるであろう。

外務省の伺書に対し、太政官は3月31日、「公務で清国に派遣すること、外務省7等出仕 瀬脇寿人」という指令を出した。このように太政官は題名を清国派遣に変えたので、「ポシエツト探知」という名目は消えた。これはポシエツト探知を秘密にするためではなく、ポシエツト探知が主目的ではないことを意味する。清国派遣という指令書を受け取った瀬脇は、次のような訓令案を作成して提出した。

今般、清国近港視察を命じられたので、以下のとおり心得るべきこと。

- ①各港の形状、築港着手の順序を取調べること。
- ②貿易の形勢、土地の産物、輸出輸入の多寡、年々産物の増進の有無を取調べること。
- ③各港において人民の風俗、土地の陰阻、人員の多少、気候の寒暖、商船の多寡、教法の如何を偵探すること。
- ④朝鮮地の北部、ロシア領に近接する地方に入らば、良港を検出致すべきこと。
- ⑤ポシエツトに到り、時宜によっては土人を雇い、朝鮮の地に入り、土地、風俗等を探索致すべきこと。
- ⑥ポシエツトにおいて余儀なき事故ある時は、ポシエツト在留[ロシア]鎮台総督に私意を以て面会を請い依頼致すべきこと。
- ⑦同所に於て土人、朝鮮人を雇い入れ嚮導とし、事情を偵探致すべきこと³⁷。

これを見ると、瀬脇の第一の任務は築港に着手する順序を調査することだが、「築港着手」とはどの国での築港を指しているのか曖昧である。清国はこの近くに海がない。瀬脇の当初の目的は朝鮮の偵察であり、また、上記の訓令案の文脈や、この文書に添付された後述の付箋から推測すると、築港は朝鮮での築港を指すのであろう。この外務省訓令案は、外務省公信局で修正案が作成されるなど、様々な人が修正を加えたが、最終的な外務省訓令案はまだ発掘されておらず、修正された原稿のみ見ることができる。この原稿には外務大輔の印が押されているので、これが最終文書かも知れない。この原稿にて瀬脇の外務省訓令案は次のように大幅に修正された。

- ①各港の形状及び彼の方、開港着手の模様探知のこと[全面修正]。
- ②, ③ [ほぼ変更なし]

³⁶ 『太政官日誌』明治 八年 三月 三十一日。

³⁷ 一、外務省七等出仕瀬脇寿人外一名商況視察トシテ露国領「ポシエツト」へ派出ノ件 自明治八年ノ分割1, JACAR, Ref. B16080698600-0346; 具良根は以下の論文でこの文書を「日本外務省の出張命令書」と見ているが、これは瀬脇が作成した「訓令」と見るべきである。具良根, 『블라디보スト르크見聞雜記』, 『韓日關係研究』9号, 1998, 213頁。

- ④朝鮮地の北部、ロシア領に近接する地方に良港、有無のこと[最後の部分修正]
- ⑤ [全て削除]
- ⑥ウラチオストーク及びポッセツにおいて所要の事件ある時は、其地方ロシア国在留鎮台総督等に面会を請い依頼致すべきこと[全面修正]
- ⑦同所に於て時宜に依り土人、朝鮮人を雇い入れ嚮導とし、事情を偵探候こと苦しからぬこと[「時宜に依り」、「苦しからぬこと」が追加された]

このように瀨脇の第一の任務①を全面的に修正したことが注目される。その理由は、原稿に貼られた付箋に、「他国領地に我国より港を築くべき理なし。築港着手順序とは如何の事を取調ぶる事也」と記された。この文の横に「太一」という印が押されていることから、これは 4 等出仕の田辺太一が書いたものと思われる³⁸。彼は旧幕府で対外関係を担当した異色の役人である。彼は、日本が他国に港を建設するための調査を瀨脇が行うという計画を否定した。この「他国」をロシアとは到底考えられないので、「他国」は朝鮮を指していると考えられる。そうであれば、瀨脇らは朝鮮に港を建設するための調査を計画したと解釈される。また、第④項を見ると、瀨脇は朝鮮の東北部に入り、良い港を探す計画を持っていた。これらの記録を総合すると、瀨脇は朝鮮東北部で良い港を見つけ、そこに軍艦が着岸できる港の建設に着手する順序を調査することを第一の任務と考えていたと見られる。その目的は、元外務卿・副島らの課題であった朝鮮東北部に軍隊を上陸させる方策を解決しようとするものであろう。

しかし、田辺はそのような計画を否定し、代わりに「彼の方の開港着手の模様」を探知することを瀨脇の任務と考えた。この「彼の方の開港」とは朝鮮の開港を意味するものであり、田辺は将来、朝鮮が開港する時を構想していたようである。また、外務卿寺島も朝鮮の港について何かを構想していた状況は、先の花房が寺島に送った次の書状からもわかる。

朝鮮の事、今度派遣される瀨脇氏、もしラザレフ[永興]湾よく探知して来らば、必ず益あるべしと存じ候。訓條中、現に其名は記せざれども、貴意は極て同港なるべしと存じ候。然るに誰か tactic[戦術]や topography[地形学]など、少しにても心得たる軍官の同伴はなかりしや³⁹

この書状を掲載した『寺島宗則資料集』は書状の年を 1872 年と見たが、これは疑問である。寺島が瀨脇に「訓令」を下したのは 1875 年 4 月なので、花房の書状もこのころ作成されたと考えられる⁴⁰。花房は永興湾を軍事的に評価できる専門家の派遣が必要だと考えていた

³⁸ 1874 年 3 月当時、外務省の序列と人員は、『外務省職員一覽表』によると次の通りである。外務卿 寺島宗則、大輔は空席、少輔 山口尚芳・上野景範、大丞 森有禮・宮本小一・花房義質・監田三郎、四等出仕 田邊太一、少丞 鄭永寧ら 4 名、五等出仕 中山信彬、六等出仕 伊地知貞馨ら 4 名、七等出仕 瀨脇壽人・森山茂・広津弘信ら 5 名、大録以下は省略。JACAR Ref. A09054282000.

³⁹ 寺島宗則研究会, 1987, 前掲書, 613 頁。

⁴⁰ 『寺島宗則關係資料集』が明治 5 年(1872 年)として紹介した花房の書状の内容は 3 つの事項で構成されている。これらは年が異なる 3 通の書状と見るべきである。最初の事項は寺島がロンドンへ出発する直前なので、これは 1872 年の事項である。次の瀨脇に関する事項は本文に書いたように 1875 年である。最後の事項は「もし今俄に大に力を用いんも結局ラザレフと釜山、江

が、この頃はその必要はなかったであろう。すでに 1875 年 2 月、日本海軍水路部がイギリスやロシアの地図をもとに、先の「朝鮮東海岸図」を刊行し、永興湾の海図を作成していたからである。この永興湾を花房や寺島らは軍事的に重視し、将来の開港地として構想していたと思われる。このように 1875 年当時、日本政府は朝鮮東海岸に大きな関心を持っていた。

瀬脇は 1875 年 4 月から約 2 ヶ月間、ウラジオストクで調査活動を行い、その間の行程を日記『烏刺細窠斯杜屈見聞雑誌』⁴¹に記録した。これによると瀬脇は朝鮮北部には潜入しなかった。また、この記録には彼の最初の任務である「築港着手の順序」あるいは「彼の方の開港着手の模様」については何も書かれていない。代わりに瀬脇は朝鮮に関して十分な情報を金麟昇から得た。金麟昇は咸鏡道慶興部で官吏を務めていたが、ロシアの移民募集に応じてウラジオストクに移住し、ロシア国籍を取得し、当時は書堂を開いて文字を教えていた。

瀬脇は金麟昇を日本に連れ帰って外務省で雇った。瀬脇は金麟昇から聞いた情報をもとに林深造とともに、1876 年 4 月に「鷄林事略」を刊行した。第 1 巻は朝鮮の地誌、社会、政治体制などを著した。第 2 巻は軍事関係を著した。目次は兵制、試取、兵船、城堡、軍器・軍装、警急、烽燧、鍊兵、侍衛入直行巡附城門開閉、符信、兵籍、免役、救恤・給暇、留防、褒貶、軍刑、驛馬廐牧である。第 2 巻は日本が朝鮮を侵攻する際に必要な軍事情報をほぼ網羅した。朝鮮の軍事機密などを詳細に明らかにしたこの本は、日本政府にとって非常に有用な情報となる。これにより、瀬脇は「朝鮮偵探」という任務を十分に果たしたのである。

3. 日本の砲艦外交と井上良馨の挑発

朝鮮との国交交渉のために理事官に任命された外務少丞森山茂は、外務卿寺島宗則の書契を持参し、1875年2月、朝鮮側の嫌う汽船に乗って釜山倭館に入った。この時、彼は軍艦を率いるいわゆる砲艦外交を望んだが、許されなかった。彼は倭館にて訓導玄昔運らと交渉を始めた。しかし、書契の原本が日本語で書かれ、外務省印が押されたうえに「皇上」などの文字が使用されていた。このため議論があったが、朝鮮政府は柔軟に対処することを決めた。すなわち、日本使臣を慰労する宴亨を開き、その時に書契を見て格式を違えるところがあれば事理にもとづいて退け、もし日本側が書契を全て改修して奉呈するなら直ちに受け入れることにした⁴²。

これに対し、森山は宴亨の際には洋式大礼服を着用して宴亨大庁の正門から入ることを主張し問題が起きた。朝鮮側は、それは前例がないとして認めなかった。このため、交渉は深刻な膠着状態になった。重大な岐路にさしかかったと判断した森山は、副官広津弘信を帰

華島の一港を開しむるに止るべし」と書いているので、これは明らかに 1872 年ではなく、条約を締結した 1876 年前後のことである。

⁴¹ 一、外務省七等出仕瀬脇寿人外一名商況視察トシテ露国領「ポシェツト」へ派出ノ件 自明治八年ノ分割2, JACAR Ref. B16080698700.

⁴² 『日省録』高宗 乙亥年(1875)2月5日(陰)條;田保橋潔, 1940, 『近代日鮮關係の研究』上巻, 朝鮮總督府, 365 頁.

国させた。4月末、広津は外務卿に報告し、軍艦の派遣を要請した。彼の要請書は「即今我軍艦一、二隻を発遣し、対州と彼国との間に往還隠見して、海路を測量し、彼をして我意の所在を測り得ざらしめ・・・我の力を彼国に為す、只此時を好機会とす」⁴³と記した。広津や森山はペリーにならって砲艦外交を実行しようと図ったのである。

これに対して外務卿は消極的であったが、海軍大輔河村(改名後は川村)純義が積極的になり、太政官へ「北海西海測量伺書」を4月27日に提出した⁴⁴。彼のいう北海は朝鮮東海であり、西海は黄海である。海軍は朝鮮東海岸・南海岸・西海岸の測量を申請したのである。この伺書が認められ、5月4日、海軍省は太政大臣に軍艦雲揚と第二丁卯を対馬から朝鮮国へ海路研究のために回航させることを届け出た⁴⁵。雲揚艦長井上は、以前から渴望していた朝鮮行という願いが叶えられて大喜びであった。第二丁卯艦は同年4月13日、測量艦として水路寮に引渡された測量専用艦である。

出航命令を受けた雲揚艦は5月10日に東京品川を出発し、第二丁卯艦は5月16日に長崎を出航した⁴⁶。彼らは対馬の港と水路を調査した後、雲揚艦は5月25日、第二丁卯艦は6月12日釜山に到着した。雲揚艦には測量担当の少尉立見研が乗船し、第二丁卯艦には水路寮11等出仕官吏が1人、15等出仕官吏が2人乗船した⁴⁷。

雲揚艦に乗った立見らは、長崎県唐津を出航した5月20日から、釜山を出航する6月29日までの行動を航行日誌「朝鮮国回航雑誌」⁴⁸に詳しく記録した。日誌によると、雲揚艦は釜山港に到着した後、釜山港や周辺の島などを測量した。ただしこの時、海軍はすでに朝鮮の海図を入手していたため、彼らの測量は海の深さなどを測定する程度であった。また、彼らは絶影島では石炭を採掘できるという未確認情報や、清水を確保できることなどから、島が艦船の普及基地に適していることを知った。後日、井上は釜山を占領し、絶影島に石炭と水補給所を設置して運営すれば、この地方は日本の所有になると提案した⁴⁹。この言葉通り、後日補給所が設置された。

彼らは釜山では朝鮮に脅威を与えるため砲撃練習などをおこなった後、雲揚艦は6月19

⁴³ 『大日本外交文書』第5巻, 71-72 頁. 建議書に日付がないが、提出は4月23日とされる。

⁴⁴ 『朝鮮理事誌』(正本)/2 自明治八年二月 至同年十一月四日, JACAR Ref. B03030132600-0180.

⁴⁵ 『公文録』明治八年五月, 第五十一巻, 「海軍省伺(布達)」, JACAR Ref. A01100106200.

⁴⁶ 海軍省, 「記録材料・海軍省報告書第一」, 『海軍省報告書』第一, 自明治元年9月 至同9年6月 JACAR Ref. A07062089000, 64-65/133.

⁴⁷ 外務省, 『朝鮮理事誌』(正本)/3, JACAR Ref. B030301327000-0213~0221.

⁴⁸ 「明八孟春 雲揚 朝鮮廻航記事」(防衛省防衛研究所所蔵)に収録。この資料の解題は、鈴木淳, 「雲揚艦長井上良馨の明治八年九月二九日付け江華島事件報告書」, 『史学雑誌』111 巻 2号, 2002, 68 頁。

⁴⁹ 藤田定市 編, 『海軍逸話集』, 有終会, 1930, 14 頁。

日、いったん釜山港を離れ、10日にわたって永興湾と迎日湾を測量した⁵⁰。この航行は先の「朝鮮国回航雑誌」に記録されたが、本稿は理事官森山茂が6月29日に入港した雲揚艦長井上から聞いた話を引用する。

雲揚艦帰来。艦長井上少佐の話に咸鏡道永興に泊ること凡そ3日。少し湾中の深淺を測量せり。此地は北面の良港にして大河湾に注ぐもの6条あり。一日、端船を以て之に遡ること3里。測るに、なお小汽船を容れるに足る。兩岸、萩・蘆ますます望む。平地多し。湾中に一小島あり。製塩場を設けること数カ所。漁戸ところどころに散布して土人すこぶる質朴。利を以て誘すれば太だ馴れ易きに似たり…帰路慶尚道迎日湾に入る。此れ良港と云うに非ざれども東北面の一港とす。地形、平坦にして頗る沃壤。人家また多し。慶州県令、我艦の入港を見るや、兵数百を率い次官を派して来意を訊問す…其兵士等、携える所の器械を見るに日本の古銃および竹槍の如きものにして其状貌実に一笑に堪えたりと⁵¹。

このように雲揚艦の東海探査は、永興湾の深さを測定し、ここに流入する川は軍艦がどこまでさかのぼることができるかなどを調査した。迎日湾で井上が出会った「慶州県令」とは迎日県監金命求である⁵²。彼が川を遡ってきた小さな船の船員たちにどこで何のために来たのか尋ねたところ、日本人たちは大日本帝国東京から来たが、水、薪、食糧が足りなかったでここまで来たと答えた。ところが小さな船は管理者との問答が終わると何も補給せず帰った⁵³。日本人のいう水などの補給は口実だった。この口実は不法侵入を隠蔽するのに効果的だった。これを可能にするように、森山は朝鮮側との交渉で「昨年の秋と今年の春、国旗の図版を提供し、もし支那海を行き来する「日本」艦船が風波や水、薪のために海岸に入ることがあれば、よく保護してほしいと要請したら彼らも了解した」⁵⁴という。

再び釜山港に入港した井上は、森山から朝鮮との国交交渉が森山の大礼服問題で膠着状態に陥ったために報告のため東京に人を送るという話を聞いた。何か大きなことが起きると予想した井上は、弾薬を補うために鹿児島に行くと言った。すると森山は「自分が派遣する人が東京に到着する前にそのような行動をすると困る」と話した。井上はすべてを秘密裏に進めると約束し、第二丁卯艦には何も告げず釜山を離れ、まず長崎に行った⁵⁵。長崎に到着した井上は、すぐに艦隊指揮官の伊東祐磨に報告書を送り、最後に次のような「征韓」論を主

⁵⁰ 金光男、「雲揚号事件をめぐる一考察」、『茨城大学人文学部紀要 社会科学論集』43号、2007、38-39頁。

⁵¹ 外務省、『朝鮮理事誌』（正本）／3 自明治八年二月 至同年十一月四日、JACAR Ref. B03030132700-0224。

⁵² 朴漢珉、前掲論文、2022、19頁。

⁵³ 前掲「朝鮮国回航雑誌」；金光男、前掲論文、2007、39頁。

⁵⁴ 『大日本外交文書』第8巻、53項、123頁。

⁵⁵ 藤田定市編、前掲書、1930、9頁。

張した。

嗚呼、此国ヤ反覆無信シテ失礼ナル事言語ニ絶ヘタリ。是迄屢我国使ヲ斥クルノミナラズ、又此度ハ我服製更革ノ儀ニ喙ヲ容レ、言語誹謗ニ涉リ底到相接ヲ拒ムニ至ル。相接ヲ拒ムトキハ則我国ヲ斥クルノ理ナリ。

如此失礼ノ国ヲ其儘差置クトキハ我国威アラズ。国威アラザレバ他国ノ侮漫ヲ受ルヤ無論ナリ。故ニ是非コレヲ討タザルヲ不得。返覆推考スルニ、此国ハ数百年来不開化ノ習俗ニシテ、実頑愚ナリ。故ニ理ヲ以テ責ルトモ益キナシ。惟タ兵ヲ以テ攻ルニシカズ。

将タ此国ハ我国ニ於テ要用ノ地ナリ。然ルニ若シ如斯非礼ナル時ハ底到必他国ヨリシテコレヲ攻ルナラン。他国ヨリコレヲ攻ル時ハ前文中如述、一朝ニシテ其有トナス事必セリ。此国若他国ノ有トナル時ハ我国更ニ伸頭ノ時アラス。惟り苦心ニ止ルノミ。将ニ此国ヲ以テ我有トナス時ハ益々国礎ヲ強クシ世界ニ飛雄スルノ梯弟ナリ。嗚呼国ノ強弱此ノ一挙ニアル思ハザルベケンヤ。

此度ハ之レヲ攻ルノ名義充分アリ。実ニ好機械ナリ。且此節国内ニ一揆起り其他内患アルヨシ(詳細別紙ニアリ)彼是天之レヲ我ニ賜フ時ナリ。若シ賜機ヲ外シ不討トキハ後來悔ル事有ン乎ト疑フ……

何卒前件ノ好機械深く御洞察被下是非早々御出兵ナラン事ヲ希望ス。⁵⁶

このように「征韓」の実施を訴えた井上は、後日の陳述によると許可を受けて鹿児島に行って弾薬や火薬などを搭載した。その時、彼は「朝鮮で事が起きるかも知れぬ」と話したところ、みんなが一生懸命作業をしたという。ところが、再び長崎に行ったら、なぜか井上に北海道に行くように命じられた。これに不満を持った井上には神戸港に行き、海軍卿と直接談判し、結局清国営口に航行する許可を得た。彼はこのような決定が変わらないように急いで長崎に行って石炭を満載するとすぐに出航したという⁵⁷。

井上の陳述は55年後に行われたので、上記の証言には些細な記憶の誤りがある。彼は「海軍卿」と話したが、実は海軍大輔であり、当時海軍卿は空席だった。また「営口」は正確にはその近くにある「牛莊」であり、当時遼東半島で唯一の開港場だった。この開港場は後日営口に移った。井上の証言の中で彼が許可を受けて鹿児島まで行って苦労して弾薬を搭載し、「朝鮮で事が起きるかも知れぬ」と話したことが注目される。井上は森山からフランス船が江華島水域で朝鮮側から火攻を受けたという事実を聞いていた。このため井上は要塞になっている江華島では朝鮮側砲撃があるだろうと予想し、これに対抗して砲撃戦をおこなうつもりであっただろう。すなわち、井上は江華島での挑発を図ったのであろう。また、海軍が彼に突然北海道に行くことを命じたのは、それほど危険な井上を朝鮮問題から遠ざけるためだった

⁵⁶ 「明八 孟春 雲揚 朝鮮廻航記事」(防衛省防衛研究所所蔵); 鈴木淳, 前掲論文, 71 頁; 김흥수, 『운요호 사건과 강화도조약』, 동북아역사재단, 2022, 44-45 頁。

⁵⁷ 藤田定市編, 前掲書, 1930, 9-10 頁。

と考えられる。しかし海軍大輔川村は井上の情熱に負けたのか、結局は朝鮮に行くことを許可した⁵⁸。海軍大輔から許可を受けた井上はすぐに朝鮮へ出航した。この結果、9月、必然的に江華島で井上の予想通りに「事」が起きた。これが江華島事件であり、彼は砲撃戦の末に朝鮮側の大砲などを鹵獲し、長崎へ凱旋した。

4. 榎本武揚の「征韓」提言

外務省には日本の国防の観点から「征韓」論を唱える官僚もいた。ロシア公使榎本武揚である。かれはサンクトペテルブルグでサハリンの国境画定問題を交渉中であつたが、サハリンや沿海州へ急速に進出したロシアに脅威を感じて「征韓」論をととなえていた。1875年1月、榎本は寺島に対し、ロシアが朝鮮に進出する前に日本は朝鮮を訓導し、日本との交誼を篤くし、日本の威徳を朝鮮に感化させるべきである、もしロシアが先行して対馬島対岸の朝鮮の地に拠点を築いたら日本の海防に脅威になる、昨年、日本政府が森山を朝鮮へ派遣したのは時宜を得たものである、もし朝鮮が頑迷で日本と交誼を結ぼうとしないなら、事が起きたときに対馬島の対岸を占拠して日本の拠点を築くべきであると進言した⁵⁹。

このように榎本の「征韓」論は、ロシアの朝鮮進出を阻むために日本が朝鮮に橋頭堡を築いて日本の国防を強固にしようというものであり、井上良馨の考えと似ている。翌年、榎本の望むような事が起きた。1876年9月、井上が挑発した江華島事件である。榎本は外務卿寺島宗則から江華島事件の発生を知らせる次の電報を受けた。

「9月20日、我が軍艦、朝鮮の都近辺の海岸測量の時、彼より発砲した故に、翌朝、その趣意を糺そうとして船を進めた。ふたたび発砲があり遂に交戦に及ぶ。我が兵士は上陸して台場を破壊し、引き上げて帰った」⁶⁰

これに対して榎本は、10月10日付け公信を寺島へ送り、次のように進言した。この事件はいわゆる「戦争の原因(casus belli)」とみなすべきであり、廟議がいよいよ決議したなら迅速に全力を挙げて朝鮮を圧伏し、こちらの条件(term)を承諾させるべきである。直ちに出兵して対馬島の対岸にある地方か島を占拠し、そこへ朝鮮の重臣を呼び出して最後通牒を突きつけるのが手っ取り早い。また、朝鮮を圧伏するには直ちに首府へ進攻するとともに、東海岸の永興湾も占拠して朝鮮の勢力を分散させるのも一策である。そのために必要なチウサン⁶¹[釜山]より魯領ポシエット湾迄の海岸並に湾港の図は、先年プチャーチン氏の測量した図面

⁵⁸ 김흥수는、前掲書 66 頁にて河村はその席で井上艦長に行動指針を伝えたのであろうと記した。

⁵⁹ 『大日本外交文書』第8巻、71 項、172-174 頁。

⁶⁰ 『大日本外交文書』第8巻、56 項、127-128 頁。

⁶¹ 下記の論文 15 頁に掲載された<図 3>、コルトン「日本地図」にある 'P. Chusan' は、同論文 14 頁にある瀬脇らが翻訳した<図 2>に釜山岬と表記された。朴炳涉「日本の 第 3 次 鬱陵島侵入事件과 鬱陵島奪取企図」、『獨島研究』33 号、2022、14-15 頁。日本語訳は、<http://www.kr-jp.net/ronbun/park/park-2212-3rd.pdf>

を入手し、彼の紀行文を翻訳して7日以内に郵便で送ります⁶²。

このように榎本はすぐ朝鮮に進攻するよう提言したのである。ところで彼はオランダで国際法を学んだ外交官であり、『海律全書』という稿本を書くくらい特に海の万国公法を熟知していた⁶³。外国の船舶が許可なしに他国の領海に入って測量をするのは国際法違反であることを十分に承知していたであろう。あえて、彼はそれを無視して朝鮮側の砲撃を開戦の口実にしようと提言したのである。彼は弱小国には国際法を無視する典型的な帝国主義的官僚である。さらに、榎本は「征韓」の日が近いとみて急いで朝鮮の事情を知りうる書籍の翻訳をおこなった。その書籍とはフランス人宣教師ダレ(Claude Charles Dallet)の著書、『朝鮮教会史(Histoire de L'Eglise de Corée)』である。この著書で「征韓」に有用な部分を、公使館で雇っているオランダ人医師にオランダ語に翻訳させ、それを榎本が日本語に翻訳した。1876年1月に完成した稿本にて彼は「征韓の件が日を追って切迫し、両国に何か大事が起こりそうである。したがってこの書は有用であり、付図などでは朝鮮の山河の位置や兵營の多少など一目瞭然であり、必ずや日本の海陸将校に参考になるであろう」と序文に記した。この稿本は、9月には『朝鮮事情』と題して出版された⁶⁴。この著書や、先の瀬脇の『鷄林事略』などは日本が朝鮮を侵略する道具として大いに活用されたであろう。

このころ、加茂儀一によれば、榎本公使は、ロシア政府が朝鮮の元山を租借してそこに一大軍港を築こうとしていることを探知し、いそいで書記官を賜暇に託して帰国させ、政府に報告させた⁶⁵。この情報は日本政府に大きな影響を与えたようである。この当時、日本側は砲艦外交の仕上げ段階にあった。江華島事件を解決するため全権大使黒田清隆は軍艦6隻を率いて朝鮮側を威嚇しながら江華島条約(日朝修好条規)を結んだ。この合意によって日本側は開港地のひとつに永興湾を指定した。具体的には文川郡松田を指定した。これに対して朝鮮側はその近くには太祖廟があるとして拒否していた。そのころの永興は草屋蕭々たる土地であり、貿易の利がまったく見込めない土地であったので日本側は他の地方も一応は検討した。しかし、日本側は基本的に「一の所見」から永興湾にこだわった⁶⁶。その「一の所見」とは、榎本の情報などを考慮した軍事的な重要性であろう。永興湾は大型軍艦が停泊できるうえに良水を得られる。

この港を日本への開港地とすることができればロシアの進出を牽制でき、軍事的価値が高い。結局、日朝両国は永興湾でも太祖墓から遠く離れた元山を開港地にすることに合意した。これによりロシアの元山租借という計画が消えた。このように永興湾はかつて朝鮮進出を狙った日露両国にとって軍事的要衝地であった。

⁶² 『大日本外交文書』第8巻、56項、128頁。

⁶³ 朴炳涉, 「卷末 日本人の 第3次 鬱陵島侵入」, 『韓日関係史研究』35集, 2010, 207頁。

⁶⁴ 榎本武揚 重譯, 『朝鮮事情』, 東洋社, 1876。

⁶⁵ 加茂儀一『榎本武揚』中公文庫、1988、490頁。

⁶⁶ 『大日本外交文書』, 第9巻, 191項, 311頁。

IV. 結び

江戸幕府を打倒した明治新政府は封建国家を近代国家に作り変える過程で多くの困難に遭遇し、様々な混乱が起きた。新政府は政治に対する不信・不満を沈静化するため、明治維新の三傑と呼ばれる呼ばれる木戸孝允は 1868-1869 年に、また陸軍大将兼参議である西郷隆盛は 1872-1873 年にそれぞれ「征韓」を主張した。彼らの「征韓」論は「失政転嫁型征韓論」である。ところが、木戸は政局が彼の思いどおりに日本で天皇を中心とした中央集権体制が確立されると、「征韓」に消極的になり、ついに西郷らが「征韓」を主張した時は「内治」優先を主張し、猛反対した。

西郷ら軍部が 1872 年に立てた「征韓」作戦を軍事的に見ると東海岸に弱点があった。彼らは、東海岸では軍艦が入港して兵士を上陸させ得る港を見つけられなかったので、東海岸での作戦を欠落させた。したがって、日本が侵略したとき、朝鮮国王は北東部の山岳地帯に避難することができ、この作戦は万全ではなかった。

この欠点を重視した外務卿副島種臣は独自の「征韓」構想を練った。元来、彼は東洋制覇を夢見る国権伸張主義者であり、朝鮮を日本の保護下に置かなければならないという考えを持っていた。副島の「征韓」論は「帝国主義型征韓」である。彼の「征韓」作戦は、兵士 5 万人が朝鮮西北部と東北部の二か所で攻撃を開始し、清国とロシアの干渉を防ぎながら、南下して朝鮮王を捕えるものであった。この戦略の致命的な弱点は東海岸であり、朝鮮東北部にどのように兵士を上陸させるかが問題だった。これを解決する前に、副島は西郷とともに「征韓」論政争で敗北し、下野した。

副島の帝国主義型「征韓」論は外務省内に根付いた。これを継承したのが瀬脇寿人や森山茂、榎本武揚らである。彼らはロシアなどが朝鮮へ進出する前に日本が朝鮮を日本の勢力下におくべきであり、それが平和的に成就しないようであれば「征韓」を実行すべきであると主張した。さらに、森山は副島の「征韓」戦略も継承し、「征韓」の際には2万の軍隊を朝鮮の東北部と西北部から進撃させるべきであると主張した。

ところが朝鮮東北部での軍隊上陸問題が依然として残った。この問題を解決するため、1875 年、瀬脇寿人は朝鮮東北部に潜入し、適当な港を探し、軍艦が着岸できる港にする手続きなどを調査しようとした。しかし、外務省内の反対意見のためにその調査は中止になり、代わりに朝鮮の開港着手に関する調査が指示された。瀬脇は、ロシアのウラジオストックで活動する内、ロシアに帰化した朝鮮人金麟昇に出会い、彼を日本へ連れて行き、彼から十分な朝鮮の軍事情報などを得た。

同年、朝鮮では成長した高宗の親政が実現した。すると、欧米列強を排斥する政策を主導した大院君が退き、朝鮮政府は柔軟な対日政策に転じた。政府は東萊府使に対し、釜山へ派遣された日本の外交官森山茂のために宴亨を開き、日本政府の書契に関して協議する

よう命じた。ところが森山が慣例を破って宴亨にて西洋式の大礼服を着用すると主張したため、交渉が膠着状態に陥った。これを打開するため、森山は日本を開国させた米国フェリー提督を倣って朝鮮に対する砲艦外交を試みた。このために軍艦2隻が派遣されたが、そのうち1隻は雲揚艦で、艦長は井上良馨であった。彼は露骨な侵略思想を持つ軍人であった。井上は釜山近くの水路を調査した後、特別に永興湾を選んで水路調査をした。日本海軍は「征韓」実行時、朝鮮東北部の港湾問題がネックになっていることをよく認識していた。このころ、日本海軍は英国から得た情報に基づいて、朝鮮の海図としては初めての「朝鮮東海岸図」を作成していたが、この海図と井上の現地調査によって「征韓」実行時、永興湾に軍艦が入港できるという確信を得た。これにより、日本が「征韓」を実行する際に隘路として残っていた朝鮮東北部の港湾問題が完全に解決された。

永興湾などの水路調査を終えた井上は釜山に戻り、森山から日朝交渉が大礼服問題で膠着状態に陥ったという話を聞いた。すると井上は服装問題で交際を拒絶する朝鮮の無礼を看過しては日本の国威が立たない、朝鮮は愚かな国だが日本には有用な国家なので他国が朝鮮を攻略する前に日本が攻撃しなければならないと軍首脳に進言した。また、彼は朝鮮西海岸を航行して事件を起こすことを森山に予言し、行動に移った。彼は要塞地江華島で攻撃を受ける可能性に備えて鹿児島弾薬廠で雲揚艦に弾薬などを満載したが、その際に「朝鮮で事が起きるかも知れぬ」と予言した。海軍はこのように危険な井上を朝鮮から遠ざけようとしたが、これに不満を持った井上はむしろ海軍大輔河村を説得し、朝鮮南海・西海の水路調査を認めさせた。勇んで出航した井上はついに要塞である江華島水域に侵入して測量したため、必然的に砲撃事件が起きた。

この江華島事件を外務卿の電報で知ったロシア公使の榎本武揚は、オランダで学んだ万国公法を応用し、この事件を「戦争の原因」とみなして釜山近くを占拠し、朝鮮の重臣を呼んで「最後通牒」を伝えるよう提案した。榎本は、他国の沿岸を許可なく測量することが万国公法で不法であることをよく知りながら、万国公法の恣意的な利用をはかったのである。さらに、榎本は朝鮮を圧伏するために陸軍が首都へ進撃するとともに、東海岸の永興湾も占拠して朝鮮を攪乱することも進言した。このために必要な東海岸に関する情報をロシアから入手し、外務省に送った。また、フランス神父が刊行した『朝鮮教会史』にて必要な部分を翻訳し、その稿本を「朝鮮事情」と名付けて外務省に送った。海軍は榎本の情報をもとに「朝鮮東海岸図」を改訂した。

しかし、日本政府は榎本の「征韓」方策を採用せずに砲艦外交を続け、軍艦6隻を江華島に派遣した。1876年、全権大使の黒田清隆が朝鮮側と交渉し、日朝修好条規を結んだ。これにより、両国の実務者たちは朝鮮の三つの開港地問題を話し合った。このころ、榎本はロシア政府が東海岸にある元山の租借を計画しているという情報を得て外務卿に伝えた。日本側は榎本の情報などをもとに元山を擁する永興湾の開港にこだわった。朝鮮側はこれに難色を示したが、結局元山を開港地に決定した。ここは経済的な価値は低いが軍艦入港が可能で、日本が「征韓」を実行することになれば日本軍の重要な上陸地となる。また、元山が日本に

開放されればロシアの南下を抑えるのに効果的である。このように元山港は日本にとっては「征韓」の観点とロシアの南下を抑制するという国際政治の観点から重要な港であり、1880年(高宗 17、明治 13)日本に開港された。

【参考文献】

- 구양근, 1998, 「블라디보스토크 견문잡기」, 『韓日關係史研究』 9 호
- 김홍수, 2013, 「1875 년 朝日交渉의 실패 요인」, 『韓日關係史研究』 45 집
- 박병섭, 2010, 「한말 일본인의 제 3 차 울릉도 침입」, 『韓日關係史研究』 35 집
- , 2022, 「일본의 제 3 차 울릉도 침입 사건과 울릉도 탈취 기도」, 『獨島研究』, 33 호
- 박한민, 2022, 「1870 년대 일본 기록에 나타난 울릉도 개척 청원과 나가사키현」, 『海洋領土研究』, 제 23 권
- 『日省録』
- British Foreign Office, F.O. 46 (日本国会図書館 マイクロフィルム所蔵)
- Colton, G. W., 1855, *Colton's Atlas of the World Illustrating Physical and Political Geography*, New York
- 加茂儀一, 1988, 『榎本武揚』, 中公文庫
- 広瀬為興, 1979, 「明治十年西南ノ戦役土佐拳兵計画ノ真相」, 『鹿児島県史料 西南戦争』 第三卷
- 高橋秀直, 1992, 「征韓論政変と朝鮮政策」, 『史林』 75 卷 2 号
- 『公文録』 明治八年五月, 第五十一卷
- 宮地正人, 2012, 『幕末維新変革史』 下卷, 岩波書店
- 金光男, 2007, 「雲揚号事件をめぐる一考察」, 『茨城大学人文学部紀要 社会科学論集』 43 号
- 多田好問, 1968, 『岩倉公実記』 下卷, 原書房
- 大西郷全集刊行会, 1927, 『大西郷全集』 第三卷, 平凡社
- 藤田定市 編, 1930, 『海軍逸話集』, 有終会
- 鈴木淳, 2002, 「「雲揚」艦長井上良馨の明治八年九月二九日付け江華島事件報告書」, 『史学雑誌』 111 卷 12 号
- 鹿児島県教育会編, 『伊地知正治小伝』, 鹿児島県教育会
- 木戸公傳記編纂所, 1930, 『木戸孝允文書第 3』, 日本史籍協会
- 寺島宗則研究会, 1987, 『寺島宗則關係資料集』 下卷, 示人社
- 小林茂, 2011, 『外邦図』, 中公新書
- 手塚律蔵・佐波銀治郎, 1862, 『格尔屯氏 萬國圖誌』.
- 外務省, 1872, 『朝鮮事務書』, JACAR Ref B03030169600
- , 1874, 『外務省職員一覽表』, JACAR Ref A09054282000
- , 1875, 『朝鮮理事誌』(正本)/3, JACAR Ref. B03030132700
- , 1938, 『大日本外交文書』, 日本國際協會
- 煙山専太郎, 1907, 『征韓論實相』, 早稲田大学出版部
- 長正統, 1982, 「内閣文庫所蔵「朝鮮國圖」およびその諸本についての研究」, 『史淵』 119 号

田保橋潔, 1940, 『近代日鮮關係の研究』 上卷, 朝鮮總督府
諸星秀俊, 2009, 「明治六年「征韓論」における軍事構想」, 『軍事史学』 177 号
醍醐龍馬, 2018, 「外務卿副島種臣と日露領土交渉」, 『国際政治』, 191 号
佐田白茅, 1903, 『征韓論の舊夢談』, 私刻本
海軍省, 『海軍省報告書』 第一, 自明治元年9月 至同9年6月
榎本武揚 重譯, 1876, 『朝鮮事情』, 東洋社
『太政官日誌』